

第3部 その他の取組について Topics

01 NEXT STEP 工房

Topics

本機構では、学生が県内各地域をフィールドに、地域がかかえる課題や学生自身が課題と考えている事象について、その解決を図り、地域と共に成長することを目的に、地域活動・研究支援のプラットフォーム「NEXT STEP 工房」を設置（平成30年4月～）した。

5月14日（月）、15日（火）には地域に関わる研究や活動を行っている、あるいはそのような活動に興味がある学生・教職員対象に説明会を開催した。運営チームリーダーの人文社会科学部五味教授から、本工房の構成や活動の内容、エントリー方法の説明があり、2日間で延べ70人以上が出席した。参加者から質問や意見が多数あり、本工房に対する期待や関心の高さが感じられた。

6月3日（日）には盛岡市産学官連携研究センター（コラボMIU）を会場に、地域活動を行っているグループによる活動紹介、参加者同士の交流、新しい地域プロジェクトが立ち上がるきっかけ作りなどを目的にワークショップを行った。ワールド・カフェ形式※で『大学生が地域でできることは？大学生が地域でやりたい（やりたくなる）ことは？大学生が地域ですべきことは？』をテーマに話し合い、「地元に残りたくなるようなまちづくりのために企業と連携していきたい」、「自分たちがやりたいことをやるべきではないか」、「卒業後



説明を行う人文社会科学部五味教授（5月14日、15日）



ワークショップ

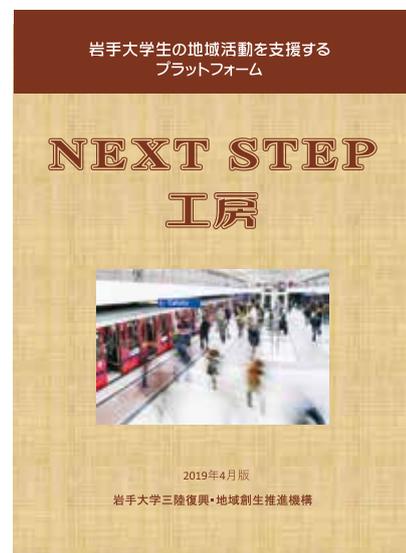
も関わりを続けられるという視点も大事」など、地域に対する活動に関する多様な意見を共有する場となった。その後、既存グループからのPRやフリートークが行われた。

NEXT STEP 工房には、平成 30 年度の 1 年間で、約 125 名のほか、地域に関わる団体・プロジェクト等 25 チームがエントリーしている。今後もエントリーの呼びかけを行いながら、ワークショップや地域活動に関する情報提供などを通じて、学生が主体となる活動を支援し、地域に根ざした取組をサポートしていく。

※『カフェ』のようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれたテーブルで自由な対話を行い、他のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を集めることができる対話手法の一つ。(出典：「ワールド・カフェの手引き」SPOD フォーラム 2012 編)



興味のある団体とのフリートーク



NEXT STEP 工房 Leaflet



最後に記念撮影

02 地域連携フォーラム

Topics

○ 釜石

釜石市民ホール TETTO にて、「地域連携フォーラム in 釜石」を行い、当日は 140 名以上の市民の方々や、高校生・大学生・企業・行政関係者に参加いただいた。発表第 1 部では、菅原悦子理事・副学長からの「釜石キャンパスの概要説明」に続き、釜石キャンパス駐在の農学部後藤友明准教授「水産システム学コースの説明」、キャンパスで学ぶ大場由紀さん（大学院生）「釜石での研究と学生生活」、釜石高等学校 辰巳教諭「SSH の概要説明」、高校生の研究グループ（2 グループ）「甲子柿由来のタンニン濃度」・「釜石の活性化のために～釜石の人口減少率を抑えよう～」と題した発表が行われた。

第 2 部では、農学部下飯仁教授「釜石はまゆり酵母の高機能化～更なる利活用のための育種～」、農学部三浦靖教授「科学的根拠に基づいた加工食品の開発～甲子柿粉体、柿の葉寿司など～」、人文社会科学部 田中隆充教授「デザインの力で釜石は一番になれる！～“水産品・子業製品・スマホのアプリ等”のデザイン事例を通して～」、本機構貫洞義一特任専門職員（産学官連携コーディネーター）「岩手大学の産学官連携の取組とシーズ紹介」と多種多様な成果報告が行われた。

本フォーラムでは、これら岩手大学とかがわりのある釜石市内の研究事例を、具体的ケースを提示しながら分かりやすく市民の皆様にお伝えすることができた。また、水産システム学コースの学生が平成 30 年 10 月より釜石に転居し釜石キャンパスで学んでいることを伝えたことや、高校生や大学生の発表もあったことで、若い世代と行政・岩手大学・企業が交流することができ、地域全体として「地域創生」「産学官連携」「地域連携」活動が行われていることを意識するきっかけにもなった。



菅原前機構長



○ 盛岡

盛岡市は、岩手大学との間で、盛岡市・岩手大学連携推進協議会を組織しており、この協議会の事業として、「岩手大学地域連携フォーラム in 盛岡」を平成 20 年度から開催している。フォーラム in 盛岡の特徴は、対象とする業種を変えながら、毎年開催していることである。

今回は、「AI × IoT 時代の産業振興を推進する産学官連携」と題して、教育学部北桐ホールを会場に開催し、企業、大学・研究機関及び行政機関等から 106 名が参加した。

このフォーラムでは、はじめに盛岡市派遣の金澤研究員が、「市職員による産学官連携活動一交流・連携拠点としてのコラボ MIU」と題して、地域材の利活用に係る連携を事例として挙げながら、日頃の活動報告を行った。次に基調講演として、理工学部システム創成工学科知能・メディア情報コー



金澤共同研究員
(盛岡市派遣)



理工学部
金澤教授

03 平成30年度 首都圏報告会

Topics

東日本大震災から7年以上経過し、復興支援の取組は課題に直接アプローチするものから、これまでの経験を踏まえた新たな取組に変化している。岩手大学は、本学から見た被災地の現状をお伝えすると共に、首都圏の市民の方に身近な地域が抱える課題とどう向き合うかを考える機会となるよう報告会を開催している。3回目となる今年度は100名以上来場いただいた。

はじめに、地域防災研究センターの福留邦洋教授が、地域防災教育研究部門（地域防災研究センター）の設立経緯や地域の自主防災組織への支援、自治体・医療関係者への実践的な危機管理講座、市民、中学生などへの防災に関する講習、ハーバード大学・精華大学と共同で開催した「国際防災・危機管理研究 岩手会議」などについて報告した。続いて、地域防災教育研究部門兼務教員で教育学研究科の森本晋也准教授が、2016年の台風10号被害を教訓に、岩泉町教育委員会や国土交通省岩手河川国道事務所、盛岡地方気象台の協力を得て作成した防災教育教材（学校版タイムライン）の紹介やそれを使った教員研修、中高生への講習の実施などについて報告した。

次に、これまでの被災動物支援の取組やその教訓を踏まえた被災動物支援のための組織作り等について、三陸復興部門被災動物支援班長の佐藤れえ子農学部附属動物病院長・教授、同班の山崎弥生特任研究員が報告した。佐藤院長からは、沿岸各地の避難所でのペットレスキュー活動や2016年の熊本地震の際にマースジャパンリミテッドより寄贈された「ワンにゃんレスキュー号」の貸し出しについてなど、山崎特任研究員からは、これまでの支援活動で得た教訓を踏まえたVMAT（動物版DMAT）設立に向けたシンポジウム開催、ペット同行避難への理解を深めるためのシンポジウム開催などについて報告した。



防災教育研究部門の活動を報告する福留教授



教育学研究科の森本准教授



農学部附属動物病院長の佐藤教授



本機構の山崎特任研究員

最後に、人文社会科学部五味壮平教授と理工学部2年及川雅貴さん、人文社会科学部2年佐藤倫さんが、学生の地域活動・研究を支援するプラットフォーム「NEXT STEP 工房」について報告した。五味教授は、NEXT STEP 工房設立の経緯の説明した後、学生達が地域での活動を通じて「地域に根差す（定着する）」ことを選択肢として考えるようになれば、地域創生の原動力になるだろうと期待を述べた。次に、学生チームから「まちづくり研究会」の取組について、雫石町での温泉街活性化を目指した住民主催の会議への参加や温泉街の昔の写真を頼りに街歩きを楽しむイベント「思ひ出さんぽ」の実施、陸前高田市の災害復興公営住宅での食事会やゲーム大会の実施、公営住宅共用部分の清掃活動への参加などを報告した。また、雫石町では学生が主体となり地域を巻き込んだ活動の企画・実施、陸前高田市では公営住宅からの退去者増加やイベントへの否定的な考えを持っている住民もいるなどの課題があり、内容や工法の工夫が必要と感じていること、支援活動の必要性自体を考える時期にきているかもしれないと感じていると、今後のプランについて説明も行われた。

最後の質疑応答では、NEXT STEP 工房の活動について温泉街の宿泊施設との関係についての質問や活動の持続性の方策として起業を考えてはどうかという意見を頂き、また、雫石町出身の卒業生からはとても有難い活動でますます頑張っ欲しいとの激励があった。



NEXTSTEP 工房について報告する
「まちづくり研究会」の学生（左・中央）と五味教授（右）

平成30年度 岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 首都圏報告会

復興支援の取組を 新たな地域社会モデルへ

各地で様々な自然災害が発生している昨今、大学の東日本大震災からの復旧・復興支援の経験は、あらゆる災害への対応を考える際に役立ち、それを皆さまにお伝えすることは大学の使命だと考えています。また、東日本大震災の発生から7年が経ち、大学の復興支援の取組も課題に直接アプローチするものから、これまでの経験を踏まえた新たな取組に変化しています。

ついでに、本学から見た被災地の今をお伝えすると共に、皆さまが身近な地域の抱える課題とどう向き合うかを考える機会となるよう報告会を行います。お話し合わせの上、ご参加ください。

日時 12月2日（日）13:10-16:10

場所 日比谷図書文化館（千代田区日比谷公園）
日比谷コンベンションホール

入場無料
要申込

締切：11月16日（金）

開会挨拶 岩手大学長 岩淵 明
地域防災教育研究部門（地域防災研究センター）の取組み
地域防災教育センター教授 福留 邦洋

災害の教訓を踏まえた防災教育教材の開発と学校版タイムラインづくり
地域防災教育研究部門業務教員 森本 晋也（教育学研究科准教授）

動物と共に生きる ～人と動物の共生を目指した支援活動～
三陸復興部門被災動物支援班長 佐藤 れえ子（農学部附属動物病院長・教授）
三陸復興部門被災動物支援班特任研究員 山崎 弥生

「NEXT STEP工房」創設の試み
～地域に関わる学生の活動・研究を支援するプラットフォームとして～
NEXT STEP工房運営チームリーダー 五味 壮平（人文社会科学部教授）
NEXT STEP工房参加の学生グループ

閉会挨拶 三陸復興・地域創生推進機構長 菅原悦子

申込・問合せ先：岩手大学地域創生推進課
TEL:019-621-6629 FAX:019-621-6656 sanriku@iwate-u.ac.jp

主催：岩手大学
主管：岩手大学三陸復興・地域創生推進機構
後援：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、東京都教育委員会、マースジャパンリミテッド、復興庁、岩手県

首都圏報告会チラシ

04 沿岸部コンサート

Topics

♪ 01 管弦楽団釜石公演実施報告

12月1日(土)14時から、釜石市民ホール TETTO ホールAにて、本学管弦楽団による演奏会を開催した(主催:岩手大学、主管:岩手大学管弦楽団、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構)。

当日は、約200名の市民が参加し、遠くは宮城県からもご来場いただいた。初めに岩淵明学長から、本演奏会の開催経緯や管弦楽団の演奏が客席の皆さまの心の癒しになればとの挨拶があった。続いて、野田武則釜石市長から、沿岸部では初めて行う管弦楽団の定期演奏会ということで謝辞をいただいた。

久志本涼氏の指揮で、R.ワーグナーの楽劇「ニュールンベルクのマイスタージンガー」より第一幕の前奏曲、A.ポンキエリリの歌劇「ラ・ジョコンダ」より「ジョコンダのテーマ」と「時の踊り」、J. オフエンバックの「天国と地獄」序曲、J.ブラームスの交響曲第2番二長調作品73が演奏された。途中、ハープ奏者の森真由美氏がゲストとして演奏に加わり、オーケストラの迫力あるサウンドが会場に響き渡った。アンコールでは、「G線上のアリア」など3曲が披露され、大きな拍手の中、終演した。

来場者からは「大変良い演奏会で楽しかった」、「また演奏会を行って欲しい」という声が多数寄せられ、管弦楽団の学生からも「真新しいホールで気持ちよく演奏できた」、「沿岸出身の学生も多く所属しているので、これからも沿岸部で演奏会を行いたい」との声があり、会場が一体となっても音楽を楽しむ、素晴らしい時間となった。



久志本 涼 氏 (中央)



♪ 02 吹奏楽コンサート実施報告案

12月23日(日)14時から、陸前高田市コミュニティホールシンガポールホールにて、本学吹奏楽部によるコンサートを開催した(主催:岩手大学、主管:岩手大学吹奏楽部、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構、共催:陸前高田グローバルキャンパスほか、後援:陸前高田市、陸前高田市教育委員会)。

当日は、陸前高田市をはじめとする気仙地域から約140名の市民の皆さまに参加いただいた。初めに岩淵明学長から挨拶があり、本コンサートの開催経費の一部が2016年6月にこのホールでフリーライブを行ったスターダスト☆レビューとファンの皆さまからの寄附金であることや皆さんと共に今日のコンサートを楽しみたいとの言葉があった。続いて、金賢治陸前高田市教育委員会教育長から、陸前高田市では初めて開催する本学吹奏楽部のコンサートという事で謝辞をいただいた。

本学教育学部教授の牛渡克之氏の指揮で、第1部は川辺公一の「高度な技術の指標」、高晶師の「吹奏楽のためのワルツ」など4曲が披露され、ジョージ・ガーシュウインの「ラプソディ・イン・ブルー」では、本学教育学部特命准教授でピアニストの佐藤彦大氏がゲストとして演奏に加わった。繊細かつ迫力のあるピアノと吹奏楽の演奏が会場に響き渡り、演奏後は拍手が鳴りやまず、その拍手に応え、佐藤氏は「ポロネーズ第6番変イ長調(フレデリック・ショパン作曲)」も演奏していただいた。休憩時にはトロンボーン4重奏、木管5重奏によるロビーコンサートも行われた。

第2部はポップスステージと題し、「Welcome(真島俊夫作曲)」、「すべてをあなたに(マイケル・マッサー作曲)」など5曲が演奏された。「ど演歌えきすぶれず(杉浦邦弘編曲)」では部員3名がこぶしのきいた歌も披露した。アンコールでは、東日本大震災からの復興チャリティーソング「花は咲く」など2曲が演奏され、客席では目頭を押さえる姿もあった。

アンコールの最後の方でクリスマスツリーの着ぐるみやユニコーンのお面をかぶった学生が登場すると、客席からサンタクロースが飛び入りするサプライズもあり、笑顔溢れるコンサートとなった。

来場者からは「初めて吹奏楽の演奏を聴いたが、とても素晴らしかった」、「(演奏が)最高だった」という声が寄せられ、吹奏楽部の学生からも「普段と異なる楽器配置で大変な部分もあったが、楽しく演奏できた」、「沿岸でもっとコンサートを行いたい」との声があり、会場全体が音楽を楽しむ素晴らしい時間となった。



佐藤 彦大 氏(右奥)

